

3/12 Tue.

第636回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.636 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

プロコフィエフ
PROKOFIEV

ラヴェル
RAVEL

[休憩]
[Intermission]

プーランク
POULENC

ヴァイル
WEILL

マリー・ジャコ *-p.4*
MARIE JACQUOT

小曽根真 *-p.5*
MAKOTO OZONE

長原幸太
KOTA NAGAHARA

歌劇〈3つのオレンジへの恋〉組曲 作品33bis
[約15分] *-p.7*
“The Love for Three Oranges” Suite, op. 33bis

I. 変わり者たち
II. 地獄の場面
III. 行進曲
IV. スケルツォ
V. 王子と王女
VI. 逃亡

ピアノ協奏曲 ト長調 [約23分] *-p.8*
Piano Concerto in G major
I. Allegramente
II. Adagio assai
III. Presto

組曲〈典型的動物〉 [約21分] *-p.9*
“Les animaux modèles” Suite
I. 夜明け — II. 恋に落ちたライオン — III. 男とふたりの愛人 —
IV. 死と木挽き — V. 2羽の雄鶏の争い — VI. 昼餐

交響曲 第2番 [約28分] *-p.10*
Symphony No. 2
I. Sostenuto — Allegro molto
II. Largo
III. Allegro vivace — Presto

3/16 Sat.

第265回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.265 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

3/17 Sun.

第265回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.265 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

ベートーヴェン
BEETHOVEN

[休憩]
[Intermission]

ブラームス
BRAHMS

マリー・ジャコ *-p.4*
MARIE JACQUOT
アレクサンドル・メルニコフ *-p.5*
ALEXANDER MELNIKOV
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73〈皇帝〉
[約38分] *-p.12*
Piano Concerto No. 5 in E flat major, op. 73 “Emperor”
I. Allegro
II. Adagio un poco mosso — III. Rondo: Allegro

交響曲 第4番 ホ短調 作品98 [約39分] *-p.13*
Symphony No. 4 in E minor, op. 98
I. Allegro non troppo
II. Andante moderato
III. Allegro giocoso
IV. Allegro energico e passionato

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック生命保険株式会社

※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

3/12
定期

3/16
土曜マチネー

3/17
日曜マチネー

Maestro

指揮

マリー・ジャコ

MARIE JACQUOT, Conductor

欧州で話題沸騰
注目の新鋭が
日本デビュー！



©Werner Kmetitsch

次々と名門楽団や歌劇場の重要ポスト就任が決まり、欧州で注目を浴びるフランスの新鋭が、遂に日本初登場を果たす。

1990年パリ生まれ。パリでトロンボーンを学んだ後、ウィーンおよびワイマールで指揮を学んだ。2016年にはバイエルン国立歌劇場でK. ペトレンコのアシスタントを務め、16年と18年にミュンヘン・オペラ・フェスティバルに出演し、N. ブラース作曲の新作オペラなどを指揮。16年から19年までヴュルツブルク歌劇場で第1指揮者および音楽総監督代理を務め、19年から22年までライン・ドイツ・オペラで第1指揮者として活躍。19年にはエルンスト・フォン・シューフ賞を受賞したほか、インターナショナル・オペラ・アワードの新人賞にノミネートされた。23年からウィーン響の首席客演指揮者に就任。さらに24年からデンマーク王立劇場の首席指揮者、26年からケルン放送（WDR）響の首席指揮者への就任が決まっている。

これまでにライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、バイエルン放送響、ドレスデン国立歌劇場管、ダラス響、ベルリン・ドイツ響などに客演しており、ウィーン響とはブレゲンツ音楽祭にも登場している。オペラの分野でも活躍はめざましく、ドレスデン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、シュトゥットガルト歌劇場、ストラスブルグ歌劇場、ベルギー王立フランドス歌劇場などで、モーツァルトから現代作品まで幅広いレパートリーを指揮し好評を博す。今年2月にはミュンヘン・フィルに初登場し成功を収めた。6月にベルリン国立歌劇場にデビューする。



©Matsuki Kohei

ピアノ

小曽根真

MAKOTO OZONE, Piano

世界の檯舞台で活躍し続ける孤高の名手。巨匠リヒテルの代役としてシュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭に出演し、欧州音楽界の度肝を抜いて一躍脚光を浴びる。モスクワ音楽院卒業後、ヴィルサラーゼ、シュタイアーらに師事。テミルカーノフ、ブレトニョフ、ボルトンら名匠の指揮でフィラデルフィア管、ロシア・ナショナル管、サンクトペテルブルク響などと共演するほか、カサド指揮フライブルク・バロック管やロト指揮レ・シエクルと共演するなどピリオド楽器への造詣も深い。ザルツブルク音楽祭などに出演するほか、各国の主要ホールでリサイタルを開き、室内楽ではファウスト、ケラスら名手から厚い信頼を得る。『クラシカ誌』最優秀賞受賞のショスタコーヴィチ〈24の前奏曲とフーガ〉など録音も多数リリース。読響初登場。

ジャンルを横断し、ピアノの可能性を広げるジャズ界の革命児。1983年バークリー音大ジャズ作・編曲科を首席で卒業。同年米CBSと日本人初のレコード専属契約を結び、アルバム「OZONE」で全世界デビュー。以来、ゲイリー・バートン、チック・コリア、ブランフォード・マルサリスら世界的プレイヤーと共演。2003年グラミー賞ノミネート。クラシックでは、シカゴ響、ニューヨーク・フィル、NDRエルブフィル、サンフランシスコ響と共演するなど国際的に活躍。還暦を迎えた21年には、「OZONE 60」プロジェクトを全国47都道府県で開催。23年にはロサンゼルス・フィルとハリウッド・ボウルに出演し話題となった。現在、「From OZONE till Dawn」と題して若手音楽家のプロジェクトにも取り組んでいる。文部科学大臣賞受賞。紫綬褒章受章。



©Marco Borggreve

ピアノ

アレクサンドル・メルニコフ

ALEXANDER MELNIKOV, Piano

3/12
定期

Artist

3/16
土曜マチネー

3/17
日曜マチネー

Artist

プロコフィエフ

歌劇〈3つのオレンジへの恋〉組曲 作品 33bis

〈3つのオレンジへの恋〉とは、なんとも不思議なタイトルの歌劇だ。セルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）のこの作品は実際、かなり奇妙な内容を持つ。

笑いを忘れた王子が、魔女ファータの失態を見て笑顔を取り戻す。辱めを受けた魔女が王子に呪いをかける。3つのオレンジに恋をし、と。王子は道化とオレンジを探す旅に出る。奇天烈な冒険を経て、3つのオレンジを手に入れるが、その3つめから現れたのが王女ニネットだ。ふたりは惹かれ合うも、魔女ファータがニネットをネズミの姿に変えてしまう。ファータのライバルである魔術師チェーリイの力でニネットは元の姿に戻り、王子と結ばれる。王子を危険な目に遭わせた連中に、王は絞首刑を言い渡すが、当の本人たちは宮廷を逃げ出す。

18世紀にゴツツィが書いた喜劇を、演出家メイエルホリドラが脚色し、それを元にプロコフィエフが台本を書いた。作曲家は1918年、ロシアからアメリカへの亡命の途上に台本の草稿を書き上げ、シカゴ歌劇場の作品委嘱を確保した上で19年、音楽化に踏み切った。同時に作曲家はこのオペラから音楽を抜き出し、6曲からなる管弦楽曲を編む。これが当夜、披露される組曲だ。

第1曲「変わり者たち」はプロローグの音楽を素材とする。変わり者たちの小競り合いを描く。**第2曲「地獄の場面」**では、ファータとチェーリイのカードゲームの様子を、第1幕第2場から引用する。**第3曲「行進曲」**は、歌劇に散らばる行進曲のモチーフを集めて1曲に仕立てたもの。とりわけ、第2幕第1場の楽句を厚く用いる。王子と道化が嵐によって城に飛ばされる、第3幕第1場の場面を下敷きとするのが**第4曲「スケルツォ」**。続く**第5曲「王子と王女」**は「喉の渇き」「恋の中断」などを示す第3幕第3場の素材に基づく。**第6曲「逃亡」**は第4幕第2場の音楽を使って、処刑を逃れようとする者たちの逃げる様子を表す。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1919年（歌劇）、1919～24年（組曲）／初演：1921年12月30日、シカゴ（歌劇）、1925年11月29日、パリ（組曲）／演奏時間：約15分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、フィールド・ドラム、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロックンシュピール、シロフォン、銅鑼）、ハープ2、弦五部

ラヴェル
ピアノ協奏曲 ト長調

モーリス・ラヴェル（1875～1937）は1929年から31年にかけて、^{きた}来る演奏旅行で自演するため、ピアノ協奏曲 ト長調を書いた。同じ時期、第一次世界大戦で右腕を失ったピアニスト、パウル・ヴィトゲンシュタインのために、左手のためのピアノ協奏曲 二長調にも取り掛かっている。作曲家は両者を比較して、次のように述べた。

「ピアノ協奏曲は言葉の厳密な意味での協奏曲だ。私見では、協奏曲は陽気で華麗なもので、奥深さや劇的效果を狙う必要はない。（中略）左手のための協奏曲の書法はそれほどは軽くない。（中略）より重々しい、伝統的な協奏曲にずっと近いスタイルをとった。」

この対比は聴き手にもよく理解できる。当時の批評家も「（ピアノ協奏曲は）分かりやすく、非常に若々しい印象を与える」と述べ、作品の軽妙洒脱なさまを評価した。

第1楽章 打楽器の鞭の一撃の後、ピアノの浮遊感のある分散和音を下敷きに、バスク民謡風の旋律が流れ出す。気だるい雰囲気のスเปน風主題、ジャズの語法を意識したテーマがそれに続く。ギアチェンジをして元の速いテンポに戻り、各主題を展開。その後、蛇行しながら上行するピアノを合図に各主題を再現する。木管楽器とホルンの“露払い”の後、ピアノによる“本割”のカデンツァが始まる。最後は管弦楽全体を巻き込み昂揚して楽章を終える。

第2楽章 冒頭から4分の3拍子と8分の6拍子が同居し続ける。ピアノの独奏に、木管楽器、金管楽器、ハープ、弦楽器が徐々に加わり並走する。後半、ピアノとイングリッシュ・ホルンが付かず離れずの対話を重ねる。

第3楽章 ドラムロールとファンファーレに続いて、ピアノの無窮動が始まる。管楽器の合いの手をかわしながら、“怪獣”が地面を踏みしめるようなリズムに到達。行進曲風の部分に入る。^{せむ}忙しい展開が続いた後、冒頭のファンファーレを回想して曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1929～31年／初演：1932年1月14日、パリ／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット、エスクラリネット、ファゴット2、ホルン2、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、鞭、ウッドブロック、銅鑼）、ハープ、弦五部、独奏ピアノ

プーランク
組曲〈典型的動物〉

17世紀の詩人ジャン・ド・ラ・フォンテーヌは1668年から93年にかけて、200篇を超える寓話を発表し続けた。フランシス・プーランク（1899～1963）はパリ・オペラ座からの依頼に応え、ラ・フォンテーヌの寓話から6篇を選び出して音楽化し、そこに標題的な2曲を加え、1941年に8曲からなるバレエ音楽〈典型的動物〉を書き上げた。

翌年の初演は大成功を収める。作曲家は同年、バレエ音楽から6曲を抜き出し、管弦楽曲として独立させた。これが組曲としての〈典型的動物〉だ。「Les Animaux modèles」というのはいささか突飛なタイトルだが、その本旨は「典型的（な人間の性質を）動物（たちの^{たと}えにのせて象徴的に語る寓話）」といったところ。詩人のポール・エリュアールが、作曲家と相談の上、考案した。

第1曲「夜明け」 夏の夜明け、1日の始まり。音楽が揺蕩うように立ち上る。

第2曲「恋に落ちたライオン」 ライオンが農民の娘に恋をした。農民はライオンに交際の条件を言い渡す。“敵”の言うままに自らの“牙”を抜くことへの警句。最後の不協和音がどこか悲しい。

第3曲「男とふたりの愛人」 ふたりの女が金持ちの中年男を取り合う。“対抗勢力”の間で右往左往することとなる人物の悲哀。音の飛び交う様子に、3者のやりとりを聴く。

第4曲「死と木挽き」 薪を運ぶ木挽きが死神を呼び、楽にしてくれと頼み込む。木挽きの求める“楽”とは？“依頼”には必ず“裏の意味”がある。音楽の示す重々しい歩みは、木挽きのものか死神のものか。

第5曲「2羽の雄鶏の争い」 雌鶏を奪い合う雄鶏たちを、空から鷲が眺める。^{がい}凱歌は悲劇の序奏。驕れる者も久しからず、ただ^{もうきん}猛禽の餌の如し。音楽は「諷刺」「勝利」を経て「暗雲」へ。

第6曲「昼餐」 人々は仕事を終え、食事に戻る。厚いオーケストレーションが、気だるい夏の午後を表す。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1940～41年（バレエ音楽）、1942年（組曲）／初演：1942年8月8日、パリ（バレエ音楽）／演奏時間：約21分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3（ホルネット持替）、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、銅鑼、クロティル）、ハープ2、ジュ・ドゥ・タンブル、チェレスタ、ピアノ、弦五部

ヴァイル
交響曲 第2番

オペラ〈皇帝は写真を撮らせ給う〉と〈三文オペラ〉で大成功を収め、クルト・ヴァイル（1900～50）が長い貧困生活から脱出したのは、1928年のことだった。それまでもヴァイルは、作品で高い評価を得ていた。それが生活の糧に直接、結びつかないのは、今も昔も変わらない。たとえば、19年の弦楽四重奏曲、20年のチェロとピアノのためのソナタには、無視できない才能が発揮されている。とくに後者では、長短調から解放される道程への第一歩を踏み出した。

その歩みを確かなものとしたのが、1921年の交響曲第1番だ。これは、ヴァイルがベルリンでブゾーニとヤルナハに師事していたころ、両師の監督の下、書き上げた“習作”。それにしては、その内容は進取の気性に富んでいる。ふたりの教師よりもむしろ、私淑したシュレーカーとシェーンベルクの影響が大きい。単一楽章の体裁と、長短調を実質的に放棄した響きには、先人ふたりの「室内交響曲」の姿が見え隠れする。ジャズ風、ポピュラー節が聴こえないのは、のちのヴァイルのスタイルからすると意外とも言える。

ただし、この作品は一時、行方不明になっていた。作曲家が亡命する際、総譜を紛失してしまったからだ。亡命の次第は次の通り。ヴァイルは1933年3月14日、パリに向かって逃避行を開始する。同年2月末の「ドイツ国会議事堂放火事件」をヒトラーが政治利用し、反ナチ勢力を一掃するための口実とした。ユダヤ人であるヴァイルの身に、危険が迫っているのは明白だ。作曲家はわずかな荷物と、年頭に着手していた作品の楽譜とを携えフランスに向かう。悪名高き全権委任法成立の9日前のこと。そのとき手の中にあった曲こそ、交響曲第2番である。

到着したパリでヴァイルは、第2番の作曲を進めた。33年末にはスケッチを終え、翌34年2月にスコアを書き上げる。元々この作品は、音楽パトロンとして名を馳せたポリニャック侯爵夫人、ウイナレッタ・シンガーが委嘱したものだ。そのため、まず私的初演をシンガーのサロンでおこなった。その後、同年10月11日にアムステルダムで、ブルーノ・ワルター指揮のコンセルトヘボウ管弦楽団が公式に初演した。

ちなみに、自筆総譜においてこの作品は「交響曲第1番」とされている。現在「第

1番」として通る1921年の交響曲を、作曲家は生前、“習作”とみなしていた上、その楽譜をドイツに置いてきてしまったことが理由と考えられる（21年の交響曲は第二次世界大戦後に発見され、57年に初演された）。

作品は3楽章からなる。第1番が前衛的な作風であったのに比べると穏健で、明確に長短調の響きを持つ。とはいえ、こちらもポピュラー風ということはなく、いわゆる“クラシックの交響曲”らしいシリアスな体裁をとっている。

第1楽章 震えるような音型で葬送行進曲風の序奏が始まる。その震えが各パートに“伝染”する。やがて、その音型の上で“吊いのラッパ”が鳴り響く。切迫感あふれる3拍子の部分から主部に入る。短長や短短短長のリズムが耳を引く。しばらくすると弦楽器が伸びやかな主題を弾く。それを各パートで受け渡していく。切迫の度合いを徐々に強くした後、管楽器に跳ねるような長短短長リズムの音型が現れて展開部へ。その後、主部冒頭にに戻り当初の楽想を再現する。

第2楽章 冒頭楽章の序奏で存在を仄めかした葬送行進曲が、この楽章で完全に登場する。主題は前楽章の長短短長リズムを受け継いでいる。穏やかな部分を何度か挟みつつも、リズムの足取りはつねに重苦しい。最後は優しい表情で消え入るように終わる。

第3楽章 ロンド形式。16分音符を基本音価とする忙しないロンド主題に、基本音価を8分音符にギアチェンジしたエピソードが続く。ロンド主題に戻った後、突如、行進曲が始まる。3連符の連続が来るコーダの熱狂を予感させる。いったんロンド主題に戻ってコーダへ。第1楽章で聴いた短短短長のリズムが、サルタレッコ風のすばやい音型として戻ってくる。そのまま狂乱の度合いを高めて曲を締める。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1933～34年／初演：1934年10月11日、アムステルダム／演奏時間：約28分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、弦五部

3/16

土曜マチネー

3/17

日曜マチネー

Program Notes

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73 〈皇帝〉

1809年、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が最後のピアノ協奏曲となる第5番を完成させる頃、ナポレオン軍がウィーンを包囲した。皇帝や貴族たちはウィーンから去り、それもあって公開初演は2年ほど遅れた。

その第5番の初演で、ベートーヴェンは初めてみずからのピアノ独奏を回避した。1802年頃から遺書を書くほどに聴覚の悪化が始まっており、この初演に際しては、もはやオーケストラとのアンサンブルが難しくなっていたのだろう。なお〈皇帝〉の副題は彼の死後、作品の風格を表すものとして、主に英語圏で定着した。

曲は3つの楽章からなる。

第1楽章は、画期的なピアノ独奏による華麗なカデンツァで始まる。それにオーケストラによる勇壮な主要主題が続く。全体は「第1提示部」「第2提示部」「展開部」「再現部」からなる協奏風ソナタ形式をとりつつ、オーケストラとピアノが主要主題をめぐって、幸福な役割分担のかたちを探し求めるようにして組み立てられている。両者はさまざまなアンサンブルを繰り広げながら、最終的にオーケストラによる勇壮な主要主題と、ピアノによるカデンツァ風のパッセージの掛け合いという答えに至る。最後はそれを祝福するかのように華やかに終わる。

第2楽章は、口長調というぐもった響きの調により、弦楽器が弱音器を付けながら演奏する。全体にセピア色をイメージさせる響きのなか、ロマンティックな旋律が変奏されていく。

切れ目なく演奏される**第3楽章**は、8分の6拍子の跳ねるようなリズムを基調としている。ピアノは冒頭のロンド主題を担い、音楽展開の主導権を握る。やがてオーケストラは「ターンタタ・タンタンタン」の新しいリズムを取り入れることで、ピアノと新たな対話を繰り広げる。

〈稲田隆之 音楽学〉

作曲：1808～09年／初演：1811年1月13日、ウィーン、ロプコヴィツ侯爵邸（非公開）、1811年11月28日、ライプツィヒ（公開）／演奏時間：約38分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ブラームス

交響曲 第4番 ホ短調 作品98

ヨハネス・ブラームス（1833～97）は生涯に4つの交響曲を作曲した。第4番は、いうまでもなく最後の交響曲に当たる。ブラームスに限らず、19世紀後半を生きたドイツ人作曲家にとって、ベートーヴェンを継承することが最大の課題だった。そして、ベートーヴェンを継承するとは、ベートーヴェンの第9交響曲に続く偉大な交響曲を作曲することを意味していた。そのプレッシャーに最も苦しみ、それを乗り越えた作曲家こそ、ブラームスにほかならない。

もうひとつ彼を悩ませたのは、当時ワーグナーと対立していた保守的な批評家ハンスリックから、保守陣営に取り込まれたことだった。おかげで、表立って最先端の響きを作品にもち込めなくなったのである。そのため、斬新な響きを取り入れながらいかにカモフラージュするかが、ブラームスの戦略にもなった。

ブラームスは1883年に交響曲第3番を完成させるとすぐに、オーストリアの山間にある自然豊かな保養地ミュルツツーシュラクで、第4番に着手した。当地で84年に第1、第2楽章を、85年に第3、第4楽章を完成させている。

ブラームスは交響曲を完成させると、批評家や友人たちを呼んで、それを2台ピアノで試演するのが常だった。第4番でも同様に試演を行ったところ、彼らの反応は、作品の難しさに対して否定的だったという。

しかし、85年10月25日、ブラームス自身の指揮、マイニンゲン宮廷管弦楽団による初演は大成功に終わった。この初演では各楽章のあとに拍手が起こり、特に第3楽章はその場でアンコールされたほどだった。そればかりかコンサートが終わり、聴衆がほとんどホールを去ったのち、マイニンゲン公の希望により、第1楽章と第3楽章がさらに演奏されたという。

この交響曲第4番は彼の集大成であるばかりか、これまでの西洋音楽史を集約するような内容をもっている。全体は4つの楽章からなる。

第1楽章、冒頭の主題はあたかも「ため息をつき、上に向かって憧れ、再びため息をつき…」といった進行をとる。この主題は3度音程を骨格として、綿密に組み立てられている。ひとまずこれを「ため息の主題」と名付けておこう。楽章全体は、「提示部」「展開部」「再現部」からなる伝統的なソナタ形式でできている。ブラームス

3/16

土曜マチネー

3/17

日曜マチネー

Program Notes

3/16

土曜マチネー

3/17

日曜マチネー

Program Notes

はこの枠組みを用いつつ、「ため息の主題」がさまざまな主題と対峙しながら、次第に「激情の主題」へと変容していくプロセスを描いている。

第2楽章はゆったりとした緩徐楽章で、大きく分けるとA-B-A-Bという4つの部分からなる。A部分は中世の教会旋法により、失われた過去への憧れを表象する。2つのA部分それぞれの最後で、憧れを打ち消すように激しさを増す。それに続く各B部分では、ブラームスならではの叙情的旋律が奏でられる。

第3楽章はスケルツォ楽章に当たるが、4分の2拍子をとる。スケルツォとはイタリア語で冗談を意味し、音楽の遊び的要素が曲を組み立てる。その遊び的要素とは、リズムの遊びにほかならない。1・2・1・2と拍子をとって2拍目にくるアクセントは、間違いなくリズムの遊びである。この遊びの祭典にトライアングルが華を添えている。

第4楽章は3拍子により、バロック時代の変奏曲シャコンヌ（またはパッサカリア）で作曲されている。8小節からなるバス主題による変奏曲で、主題はJ.S. バッハのカンタータ第150番〈主よ、われ汝を仰ぎ望む〉の終曲合唱から採られている。このバス主題が30回繰り返され、変奏が重ねられる。

この楽章の中間部、ゆったりとしたテンポでフルートが哀愁を帯びたソロを奏し、続いてトロンボーンがコーラルを奏でる音楽は、西洋音楽史上、最も美しい場面のひとつである。だがその夢を打ち壊すように、速いテンポで鋭く主題が提示され、終わりに向けてリズムを激しく交差させていく。

〈稲田隆之 音楽学〉

作曲：1884～85年／初演：1885年10月25日、マイニンゲン／演奏時間：約39分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部